

第2次大戦期、日本側ラジオ傍受戦略に協力した蔽之館の日系2世 －2世獲得、調教、利用の日米心理戦

山本武利（NPO法人インテリジェンス研究所）

2018年6月30日

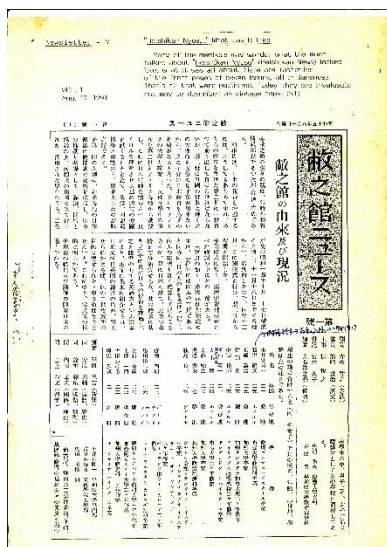
○結局インテリジェンスでもっとも効率が良いのは Open Source Intelligence(OSINT)である。その中で役立つのはラジオ・インテリジェンスである。

○最近の「拉致問題解決済みの蒸し返し」というピョンヤン放送ニュースは「ラヂオプレス」のスクープである。

○日本は暗号を米国に破られ、米国暗号を破れなかったことを想起すれば、第2次大戦でラジオ傍受ではかなりの成果を残せた。

1、蔽之館の入学者

○1期生の名前、学歴



(図1) 蔽之館ニュース1号

(図2) 蔽之館第1、2期生（ラヂオプレス社要人）

○1期から5期生まで

	入学年月日	卒業年月日	入学者数	卒業者数
1期	1939・12・1	1941・11・30	16	22
2期	1941・12	1943・4・1	22	18
3期	1943・4・1	1945・4・1	8	7
4期	1944・4・1	1945・8解散	17	

5期 1945・4. 1 1945・8解散 5
(『プロパガンダ戦史』27頁)

2、戦中の活動

場所 当初 中野区高根町12 (現・中野区東中野2-31-10)
京王線国領へYWCA「憩ヒノ家」へ1944年移転

資料 短波傍受施設移転ニ関スルノ件 アジ歴B02032445900

1944年3月15日

空爆による傍受事務停止を回避

米国国内中波放送傍受の見込み

印刷は本省で。部数縮小 短波40部、中波30部、空襲のときは同盟に依頼

男子の独身者、10数名を宿泊させる。「殊ニ中波傍受員」の収容

女子職員数名 京王沿線の一軒借家に

原紙、カーボンコピーは同盟オートバイで本省へ運ぶ

「ラジオ」室勤務人名簿 (昭和十九年十一月一日現在) 総人員73名

外務省 麹町区霞ヶ関

電話銀座5111-5119

本省「ラジオ」室 (樺山事務官室)

電話銀座6601, 7843、省内92

調査三課国領分室 東京都北多摩軍調布町国領718 居住9人

第4霞寮 (女子寮) 世田谷区大原町119 篠方 居住5人

電話松沢3733

牧嘱託私宅 (写真左下) も国領へ

3、蔽之館を作った外務省の戦略

本省職員養成関係雑件に見る現状

○昭和15年3月25日の資料

台湾総督府千葉外務部長殿

結果としての米国反逆

有田大臣

件名 日系二世養成所学生台湾見学旅行ニ便宜依頼ノ件

米国生レ二世ニ対シニケ年間日本語及日本事情ヲ学習セシメタル上對外宣伝及通信事業ニ利用スル目的ヲ以テ本省情報部同盟満鉄ヨリ所要経費支出シ本年度十六名ヲ採用、東京市中野区ノ宿舎（蔽之館）ニ收容し居レル処今般国内見学ノ一端トシテ全員二十三日東京發台湾ニ向ヒタルニ付貴地着ノ上ハ島内ノ見学等ニ付便宜供与方御配慮煩度一行引率者同飯主事ノ柳悦之（元副領事）ニ貴官宛紹介状下付シ置キタリ。

猶本教育計画ハ学生ヲ米国単一国籍ニ限リタル關係上外部ニ対シテハ同盟経営ト為シ居ルニ付右御含置アリ度（委細公信）

外務省情報部 5 万円 同盟、満鉄各 2 万円負担一学校設立費

○サンフランシスコ藤島事務代理から有田大臣あて電報

米国系**二世養成**ニ関スル件 日本人会及市民協会ヨリ十五名ノ応募者中先 2 名ヲ推薦

1、藤島四朗（21 歳）

1、染川洋二郎（23 歳）

右兩名共品行方正前途有望ナル青年

徹底した入国前の（米）国籍離脱工作—日本での徴兵回避

河相部長の構想 樺山資英の実行、高学歴 2 世の各領事による選考、村山有（たもつ）などの現地講演活動

現地領事のテクニック。日系二世養成所で共通し、傍受要員養成との本音は隠す

米国との緊張関係→パールハーバー→米国からの採用活動不可能

第 2 年度から東南アジア滞在の 2 世→開戦で帰国不能となり、1 万 2 千名の在日 2 世

二年終了後、卒業生は自主的に就職先を探せたが、満鉄、同盟通信という後援機関への就職目立つ。

外務省囑託が 1 番の就職先—主として傍受員、領事館配属もあり。

戦争末期には徴兵される者が出る。



(図3) 蔽之館前 坂本勢一出征写真

ラジオ室名簿「入営、出征者所属部隊銘及ヒ連絡先」満州第10軍事郵便気付

陸軍特務機関「に」

「関東軍情報部五十音人名録」関東軍情報部本部、歩兵、1等兵、大正7・10・9

本籍広島 22・5PW, 25・4・17帰国

二階堂進の仕事

事務局嘱託主任二階堂進のラジオ室の行動

二階堂は1944年の名簿では「進」ではなく、「栄」となっている。

「米国の南加大学を卒業して帰国した牧秀司氏と二階堂進氏(代議士)が海外放送を陸、海、外、の幹部に提供してもっぱら情勢判断に従事していた」(村山有)

「上原 大事なときには、その夜の担当者、例えば荻島君であろうが、その晩の責任者というものは、あ、これは重大ニュースだというようなときには、直接に二階堂進という後ほど田中角栄内閣の官房長になった、彼が連絡員だったんです。

中田 彼じゃなくて、牧さん。

荻島 牧さんと、彼(二階堂氏)は分析のほうをやっていたんだよ

(座談会)

4、敗戦後の見事な転身

外務省ラジオ室からラジオプレスへ。

米国籍を持ち、日本国籍を持たなかったことが彼ら2世のGHQからの戦争責任追及を回避することにつながった。c f. 東京ローズも日本国籍がなく、アメリカ国籍をもつ。

1期生が初期の理事長、理事を占める。

5、陸軍参謀本部

陸軍参謀本部第8課—米国内放送、「各種情報資料・米国内放送傍受記録」(国立公文書館)での恒石中佐名の登場。通信局から得た国内情報に特化して各機関に整理・印刷・配備か(柴橋554)。

○陸軍傍受機関 北多摩陸軍通信所(東久留米)

参謀本部、南方で超短波受信機を鹵獲。1943年3月ラジオ傍受を開始、15人の2世新規採用(鳥居英晴『日本陸軍の通信諜報戦—北多摩通信所の傍受者たち』、年表)

「米国内放送の傍受」『心理作戦の回想』259—262頁

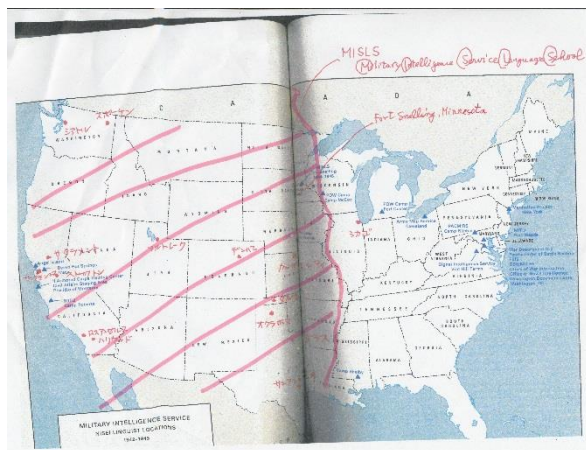
200名の2世の参本嘱託としての投入(同261頁)

「この中波傍受情報は故郷のニュースを渴望している前線の将兵にとっては絶好の材料であり、これを取り込むことによって、わがゼロ・アワー放送の信用度も高め、かつ米軍兵士達の不安や不満の芽を育てるよう努力が払われたわけである」(同262頁)

○米国内放送傍受情報 729 件

アジ歴 A30024929600 「カナダノエドワード島ニ爆弾投下事件」

アジ歴 A03024942600 「米国内中波放送傍受成果一覧」



(図 4) アメリカの中波傍受範囲 (斜線部分)

米国内中波放送の情報・インテリジェンス価値への先駆的着目—外務省ではなく参謀本部

参謀本部 資金力、権力、情報整理力、先見性、謀略性 外務省を上回る

「風船爆弾」、東京ローズ放送の効果測定、マーケティング

暗号解読の弱さを放送、電報受信でカバー

情報局、日本放送協会などとの連携強い

外務省 逡信省+陸軍参謀本部からは独立した傍受活動

アメリカは日本が自国の中波が枢軸側に傍受あるいは盗聴されていることを認知していたのか？



Students at Fort Snelling monitor Japanese shortwave news broadcasts as part of their training.

(図 5) 米国陸軍 2 世の傍受訓練

短波よりも中波の方が敵国インテリジェンスの宝庫であることを知っていたのか？
アメリカが日本占領初期（1945年10月）に日本の傍受体制を調べようとしたのはなぜか・

○海軍軍令部 大和田通信隊（新座） 381名勤務 北山節郎「日米傍受合戦」
『ピース・トーカー日米電波戦争』48－50頁

6、その他の各機関の傍受活動

逓信省逓信局放送部第3係情報受信担当—VOA、BBC、各国国策局

柴橋国隆「愛宕山情報局」『通信史話（中）』1962年、546－551頁

鳥居英春「同盟通信社川越分室について」「川越市立博物館だより」第63号2010年

サンフランシスコ、モスクー、シンガポール、ウラジオ、南京放送、AP,UP,USIS
タス、ロイターなど放送電報

ガダルカナル、レーテ島など前線での敵軍傍受

○ダキノ夫人（東京ローズ）も数十人の2世リスナー（傍受者）の中で働く、1942月から1943年12月まで同盟のタイピスト、リスナー—。

同盟通信社 世田谷で独自に細々で行う（『通信社史』549－550）（柴橋554）が、
逓信省に協力。とくに川越での1945年5月以降の愛宕分室の疎開作業に協力か
東亜研究所—ハバロフスク放送、モスクワ放送傍受速報の継続発行。 満州で傍受？
「ソヴ放送速報」独ソ戦況—ハバロフスク局1944・10・3

7、蔽之館（1939－1945）への評価

プラス

○「情報部長も河相達夫、須磨弥吉郎、田代重徳、岡崎勝男諸氏と引きつがれたが、かれらはきわめて同情ある態度で二世に接した。日夜温くいたわって世話してくれた温情忘れることはできない。課長にも広田、藤村、浅海、田尻、松井諸氏があって良くわれわれを助けてくれたことを想起する。これらの関係者に二世は終生忘れ得ぬ感謝を抱いている。

短波ニュースの要望も各方面から殺到してきた。そればかりでなく陸海軍では二世を召集し、短波傍受の訓練をして前線基地等で同じ方法で短波傍受を行なうに至った。この意味において短波放送の夢も大きく活用され、最初の提唱者としてひそかな喜びを抱いたのであった」（村山有）

「短波傍受による海外ニュース提供は二世の偉大な功績であった。かれらの語学力は言うまでもなく達者で、日夜アリのように黙々としてよく働いた。外務省はもちろんのこと、軍

関係にも重宝がられ、ついには他の役所にまで短波ニュースを提供した」(村山有)

マイナス

○「これら二世は日本政府の公式のスポークスマンとして養成され、日米理解の架け橋としての二世という当初の理念からかけ離れて、日本のアジアへの軍事的拡張の紛れもない宣伝員、公式弁護人となってしまった」(イチオカ(市岡雄二)『抑留まで一戦間期の在米日本人』65)

「2つの祖国」の葛藤のケース

戦中 蔽之館2世—結果としての米国反逆性弱い(受け身の傍受)

東京ローズ—受け身ながらアナウンサーとしてのプロパガンダ参加

1世祖国の謀略に踊らされ、大勢に掉さしつつ、自立の道を選ぶインテリ2世

かれらの日本での扱いは捕虜に準じたものだったか。それとも同胞ないし同胞の子孫として尊重されたのか。それとも捕虜と同胞との中間であったのか。

開戦時1.5万ともいわれる在日2世の意識と行動

使い捨ての目立つ日本政府、軍の雇用2世の中で蔽之館2世は敗戦のどさくさの中で旧職場の外務省で戦後の活路を見だせた希有な存在である。

参考 ハルピン学院に入学した外務省委託学生

傍受ないし通訳

対米 蔽之館—日系2世、日本人—2年間

対ロ ハルピン学院委託学生—日本人—2年間、1942年開始1945年終

1944年入学 月手当50円、入営まで本省勤務、嘱託

「定員ノ都合ヲ見テ本官ニ採用」—杉原千畝型

各年度 5名~10名

学院卒業生名簿に記載されている者多い 21期、24期

参考文献

山本武利『占領期メディア分析』法政大学出版局、1996年に発表「ラヂオプレスの誕生と発展」141-166頁

池田徳真『プロパガンダ戦史』第1章「外務省のラジオ室」3-40頁、中公新書、1981、中公文庫、2015

池田徳真『日の丸アワー対米謀略放送物語』中公新書、1979

名倉有一編『駿河台分室物語』「日本陸軍の秘密室」「資料編」自家版、2015

北山節郎「日米傍受合戦」『ピース・トーカー日米電波戦争』33-52頁、ゆまに書房、1996

鳥居英晴『国策通信社『同盟』の興亡—通信記者と戦争』花伝社、2014、「蔽之館出身の二世記者」454—457頁

鳥居英晴『日本陸軍の通信諜報戦—北多摩通信所の傍受者たち』けやき出版、2011年
糸井輝子「友情と友好を結んで—蔽之館からラヂオプレスへ」『海外移住資料館研究紀要』
第4号、2009

ユウジ・イチオカ（市岡雄二）『抑留まで—戦間期の在米日本人』64—65頁、彩流社、
2013

James C. McNaughton, *Nisei Linguists, Japanese Americans in the Military Intelligence Service in during World War Second*, Department of The Army, 2007

柴崎国隆「愛宕山情報局」通信外史刊行会『通信史話』中巻、544—554頁、電気通信協会1962

1次資料

各種情報資料・米国内放送傍受情報 アジ歴A03024880600 他

本省職員養成関係資料、外交史料館

村山有 「ラヂオプレス（RP）の誕生とその歩んだ道」（発行年不明）

「外務省ラヂオ室勤務人名簿（昭和十九年十一月一日現在）

「座談会ラヂオプレス創業者に聞く」 司会山本武利

荻島良一、中田格郎（1期生） 上原昇、浴本正生（2期生）

1995年7月10日 於博報堂（非公開）